

## ◆ドイツの生活を知る

デュッセルドルフの町並みを見た生徒たちは、第一印象を「かわいい」と表現しました。初めて見る町なのに、どこか馴染みを感じたようです。絵本の中で見た景色や、物語の中で想像した景色に似ているのかもしれませんが。そうだとすれば、ドイツの景色は、いつのまにか私たちの持っている文化の一部になっていたということになります。鉄道に改札口がないことにも、すぐに気がつきます。改札で必ず乗車券をチェックする日本のやり方が、秩序を保つ唯一の方法ではないことが分かります。昼食を手に入れるために、学んで来たドイツ語の表現を使ってお店の人に話しかけます。そこで外国語で意思が通じた喜びを味わうことができます。その国の生活を見るだけでなく体験することに大きな意味があります。

私たちは現地の先生の紹介で「ドイツ国際平和村」を訪れることもできました。紛争の地域の子どもたちを援助する仕事が行われている場に身を置いたこと、そこで働く日本人スタッフと話ができたことは、貴重な経験でした。

## ◆ホームステイと体験入学

ベルリンで体験入学するときには、生徒の家にホームステイをしました。あらかじめこちらの生徒の情報を送って、日本語担当の先生にホストを割り振ってもらいました。生徒の特徴とホストファミリーの状況をよく考えてマッチングをしてもらえたので、みんな家族の中にうまく入っていくことができました。

暗いうちから登校して、昼休みもなく7時間目、8時間目まで授業がつづくドイツの学校生活は日本とはかなりちがいます。もちろん授業はドイツ語なので理解するのは大変です。それでも、ホストの生徒に助けをもらいながら集中して授業に参加すれば、たくさんの勉強をすることができます。きれいにノートをとって、先生や友だちを感心させた生徒もいました。

用意していった日本紹介の発表も好評でした。日本語専攻の生徒でも話を聞くだけで理解するのは難しいので、写真やドイツ語のポスターなどを用意して分かりやすく工夫しました。発表を繰り返すうちに、相手の反応を見ながら話すことも少しずつできるようになってきました。

ホストの生徒やその家族とのコミュニケーションは楽ではありません。お互いに知っている英語とドイツ語、日本語を駆使してなんとか思いを伝えようとしています。大切なことが伝わったかどうか、誤解されていないか心配になることもありますが、そのときは学校で先生が間に入って手伝います。生徒たちは、言葉を学ぶことの意味と価値を実感します。

生徒たちは、それぞれの体験をレポートにまとめました。その一部は、秋の文化祭で発表することになっています。



日本についての発表

## ◆成功の条件

啓明学園の海外体験学習は、すでに関係ができていて、その土地の人と直接交流ができ、生活や学習の場が得られるところに出かけます。最近の目的地は、アメリカ、オーストラリア、ドイツ、モンゴルですが、それぞれに姉妹校や交流校があり、留学生の交換や相互訪問などの実績があります。大人数では、一人ひとりが充実した体験をすることは難しいので、啓明学園では、多くても20人ぐらいまでのグループで行くようにしています。希望者が多いときは、面接等をして行く人を選抜します。目的地に頼りになるスタッフがいるかどうか、引率者がその国の言語でコミュニケーションができるかどうかは体験学習の成果を左右する大きな要素です。

体は外国にいても、日本の友だちと日本語で話し、貸し切りバスで移動して日本語で案内をってもらうような体験では、大きな実りは期待できません。帰国生が自分を発揮できる学校であるかどうかを推し量るには、その学校がどのような体験学習を行っているかということも一つの手がかりとなるでしょう。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校  
国際教育センター

〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15

TEL : 042-541-1003

HP : [www.keimei.ac.jp](http://www.keimei.ac.jp) E-mail : [kokusai\\_info@keimei.ac.jp](mailto:kokusai_info@keimei.ac.jp)



「海外研修」「海外体験」など様々な名称で呼ばれ、期間も長短ありますが、私立高校と同様なプログラムを実施していない学校を探すのが困難なくらい、ポピュラーになっています。

受入側になっているアメリカの学校関係者からの評判は、良いものばかりとは限りません。佐々先生の上の「成功の条件」を他の学校の先生方に是非お読みいただきたいと思います。日米の関係強化(?)のために。